

一個の命

瀬戸内町立西阿室小学校 五年 禱 悠聖

だれもない海。真昼の暑さが少し落ち着き、波が行き来する音だけが聞こえてくる。空には星が無数に輝き、月の光も波に反射して輝いている。ぼくはこの海にだれもないことを確認して砂浜にこしをおろした。平べったい小石をにぎり、座ったまま海めがけて小平に飛ばした。ピシッピシッピシッと水を切つて小石は海底にしないで。

「ふんっ、たったあれだけのことで怒られるなんて。ぼくはふてくされてそう言った。」

今から数時間前。ぼくは友達のとこの海に来ていた。あまりの暑さにたえきれず、二人で泳ぐことになったのだ。しばらく泳いでちよつと休けい、と座ったところから、小さなたまごが、かくれるようにあなの中に集まっているのが見えた。

「見てみるよ、こんなにたまごがたくさん。一体何のたまごだろう。砂浜にあることは、きつと海の動物のたまごかもしれない。じゃあ、海に帰してあげよう。」

そう言つて、ぼくはたまごを一つつまみ上げた。

「だめだよ、何のたまごか分からないけれど、そんな風にさわつたり持ち上げたりしたら、中の赤ちゃんが死んでしまうよ。」

友達の悠が止めたが、ぼくは聞く耳をもたず、そのままそのたまごを一つ、海に力いっぱい投げてしまった。

砂浜を散歩中だったおじいさんは、一日十個のごみを浜から拾つて帰ることを日課としている。今日も汗をかきながら、もうすぐで十個になるごみを袋に入れながら、たまごがどう育っているかを、そうつと確かめて帰ろうと思つていた。そのとき、男の子がたまごを持つて力いっぱい海に投げるのが見えた。

おじいさんは、顔を真っ赤にして、

「何てことをするんだ。お前は大切な命を何だと思つているんだ。いいか、今晚ここに来い。お前のしたことだぞ。」

と大声で怒鳴つた。急に怒鳴られたぼくはびっくりしてぎゅうつと目を閉じ、肩をすぼめてしまった。

夜になって、ぼくはおじいさんが来るのを小石を海に投げながら待った。

「たった一個のたまごじゃないか。あんなにたくさんあるんだから、一個ぐらい。」

ぼくはそうつぶやいた。

「たった一個の命がどれだけかけがえのないものなのか、これからしつかり見ておけ。」

いつの間にか、昼間のおじいさんがぼくの後ろに立っていた。

「おっ、始まったな。見てごらん。」

おじいさんが指差す方向を、ぼくは目をこらして見つめた。昼間見たたまごから、小さくて黒い赤ちゃんが、たまごに入ったひびを大きく広げながら外に出ようとしている。両手をバタバタさせ必死にもがいている。あれはかめだ。何匹ものかめの赤ちゃんが、たまごからかえって海に向かっていて。月明かりに照らされ、小さな手足を必死に動かし、お母さんが待つ海へと向かっている。ゆっくり運ばれてくる波に乗って、ゆらゆらとゆれながら行ったり来たりしている。ぼくは、その光景を見て何も言葉が出てこなかった。心がじわじわとあつたかくなる光景だ。そして、自分のしたことがどんなにひどいことだったかを、今初めて気付いた。後かいの波が押し寄せてくる。

「おじいさん、ぼくは昼間、海に投げてしまった赤ちゃんにあやまりたい。ひどいことをしてしまってごめんね、とあやまりたい。どうしたら良いかなあ。」

ぼくは、こぼれそうになる涙をこらえながら、後ろに立つおじいさんを見ないで話しかけた。おじいさんは、

「君がそう思ってくれたこと、きつとかめの赤ちゃんには届いただろう。」

そう言つて、ぼくの頭にぼんぼんと手を置いた。そのとたん、ぼくが必死にこらえていた涙は、一気にこぼれ落ちてしまった。

次の日。ぼくは早起きをしてあの海へ走って行った。夜とはまた違う景色に、さわやかな気分になった。大きなじがダブルで出ている。右手と左手の親指と人指し指でカメラを作つて、カシヤツとダブルにじの写真をとつてみた。うん、良いことが起きそうだ。昨夜、小さな小さなかめたちが必死に歩いたあとは、もう波で消されている。新しい命がたん生した日。ぼくは一個の命の大切さを知った。同じ間違いは二度とくり返さないと心に決めた日でもある。

そろそろ帰ろうと動き出したそのとき、波間ににじ色のかめを見た気がした。につこり笑つてぼくを見ていた気がする。もしかしてあの子かな。ぼくは、もう見えないにじ色のかめに手をふつて海を後にした。

【評】失敗から学ぶ命の大切さを感じさせてくれる作品となっています。細かい情景描写や、主人公の心情変化から、目の前で起こっている出来事のような内容にも、興味を引きつけられます。

(西阿室小 講師 安原 楓)